

第2節 古墳時代の算盤玉形紡錘車—近畿地方出土例の検討—

古墳時代中期、算盤玉形をした新たな形式の紡錘車が北部九州または近畿を中心としてみられるようになる。これは朝鮮半島南部の古墳では副葬品などとしてよくみられるもので、我が国では陶質土器または初期須恵器などとともに出土することから、朝鮮半島より舶載されたもの、あるいは渡来した人々またはその子孫が日本で製作したものと考えられている。本書において3例を報告するように、近畿地方の出土例も増加しつつあり、ここにそれを整理し、その意味について考えてみたい。

1) 既往の研究

この算盤玉形紡錘車を朝鮮半島との関係で注目したのは橋口達也氏である[橋口達也1982]。橋口氏は福岡県甘木市にある池の上・古寺墳墓群の調査を通して、この紡錘車は舶載の可能性があるとした。池の上・古寺墳墓群では石蓋土墳墓などから棺内に副葬されて出土しており、その状況は朝鮮半島の例と酷似している。

一方、西谷正氏は香川県の窯址からの出土例があることなどから「日本出土の陶質製紡錘車は国産品である可能性が強い」とする[西谷正1983]。西谷氏が「陶質製紡錘車」と呼ぶものは、本論の算盤玉形紡錘車のうち須恵質のものをさし、こうした算盤玉形のものは、日本古代の紡錘車の型式編年の体系からみると突如として出現していること、また朝鮮半島南部においてふつうにみる形式であることから、朝鮮系の遺物であり、初期須恵器の系譜から伽耶系統であろうと推測している。

中村勝氏も国産説をとり、法量からの検討により、多元的な導入経路の存在を推定している[中村勝1986]。それによると、福岡西部にみられるものは径が大きく、やや薄手という傾向がみられるが、甘木・朝倉地方のものと近畿地方のものは径がやや小さく、厚みがあるという。

門田誠一氏は新羅・伽耶の人骨出土古墳と紡錘車の関連について検討し、小規模墳から王陵・王族の墓まで、女性の埋葬に際して副葬されたものとした[門田誠一1992]。そして、日本にみられるこうした紡錘車は、朝鮮半島の葬送習俗をそのまま持ち込んだ渡来1世の女性たちの異郷における終焉の姿を示すものと捉えている。

古墳時代の日本と朝鮮半島との係わり合いをみていくばあい、土器や金属製品などに重



図234 長原遺跡周辺の算盤玉形紡錘車の出土状況

点が置かれ、このような紡錘車にはあまり注意が向けられてこられなかったといえよう。また、冒頭で述べたように近畿地方での類例も増えてきており、それらと他地域の事例との比較検討から地域間の共通点・相違点が一層明らかになると思われる。なお、ここでは日本で出土

したものを須恵質・土師質などと呼ぶが、そのすべてを日本製と断言するものではない。

2) 近畿の事例

ここでは須恵質の製品に限らず、土師質や石製のものも同様に取上げる。管見によるだけでも、兵庫県2例、大阪府18例、京都府1例、奈良県1例を確認した。

兵庫県の2例は姫路市三方古墳[兵庫県教育委員会1980]と神戸市神楽遺跡[神戸市教育委員会1987]のものである。三方古墳は横穴式石室を主体部とする6世紀後半の古墳で、土師質の紡錘車が出土している。神楽遺跡では5世紀後半から末にかけての集落遺構が検出されている。紡錘車はそのSD03から韓式系土器や滑石製模造品・手捏ね土器などとともに出土した。紡錘車は滑石で作られており、側面に複合鋸歯文を線刻している。

大阪府下18例の内訳は、大阪市長原遺跡7例、瓜破遺跡1例、八尾市八尾南遺跡3例、そして東大阪市鬼塚遺跡1例、堺市大庭寺遺跡4例、深田遺跡1例、土師遺跡1例である。

まず、大阪市と八尾市の事例についてみる(註1)。長原・瓜破遺跡と八尾南遺跡は東西に接しており、古墳時代を扱うばあいにはこれらを区別してもあまり意味はないであろう。

表17 長原遺跡周辺出土の算盤玉形紡錘車

地図番号	調査名・遺跡名	遺構・層準	直径cm	厚さcm	重さg	側面角度	共伴須恵器	備考
1	NG16	SD04	3.9～4.1	2.3	40.1	120～130	TK73	
2	NG83-70	SK39	4.2	2.2	23.6+	140	TK216～TK208	[大阪市文化財協会1992a] 177
3	NG84-4	NG7B層	4.0	2.2	35.3+	120		
4	NG86-41	NG4B層	4.4	1.9	41.4+	130		本書27
5	NG86-41	SP06	3.8	2.0	33.3+	155		本書120
6	NG86-54②	NG4B層	3.8	2.4	35.9	125		本書411
7	UR93-14	SK03	4.4	2.2	46.7	125～130		
8	NG93-56	SE502	3.7	1.9	16.4+	140～145	ON46	
9	八尾南遺跡	SE15	4.1	2.0	39.2	135～140		[八尾南遺跡調査会1981]
10	八尾南遺跡	SE21	3.8	2.0	27.7	125～130	TK73以前	[八尾南遺跡調査会1981]
11	八尾南遺跡	D1区包含層	4.5					[米田敏幸1985]

そのため長原遺跡周辺からは、実に11点もの算盤玉形紡錘車が見つかったことになる。池の上・古寺墳墓群で9点であったことから、この数は注目に値する。11点すべてが土師質であり、墓からではなく集落域から見つかったものがほとんどである。この時代の集落は、南北に長い広がりをもつ長原古墳群を挟んで、その東西に確認されており、東ムラ、西ムラと呼ばれている[京嶋寛1991]。

東ムラは長原遺跡東部から八尾南遺跡にかけて存在し、そこから6点が出土している。共伴遺物の明らかなものを示すと、八尾南遺跡SE21では韓式系土器のほかTK73型式以前の段階と思われる須恵器壺がみられる。また、長原遺跡ではNG16次調査例がTK73型式の須恵器とともに溝内から出土している。この例は直径が小さい割に厚さがあり、側面の稜

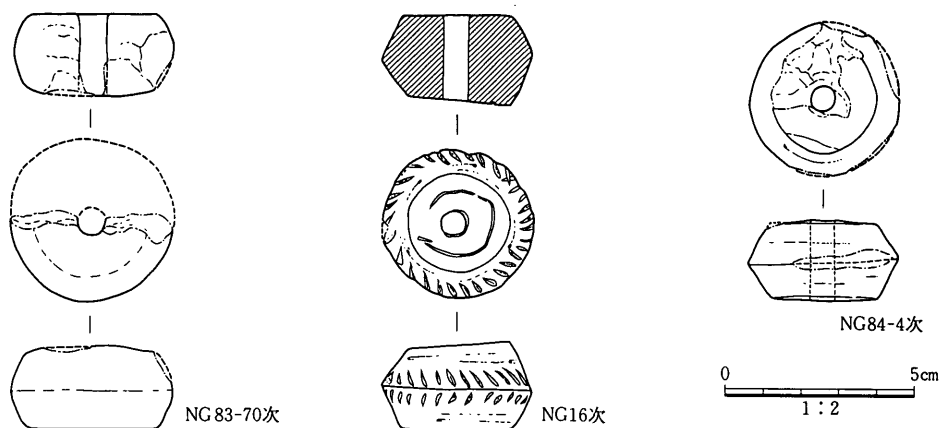


図235 長原遺跡出土の算盤玉形紡錘車

を挟んでその上下にヘラ先による刺突文が施されている(図235)。NG93-56次調査ではSE502からON46号窯段階の須恵器とともに出土している例がある。NG84-4次調査例は古墳時代の包含層から見つかったものだが、付近からは初期須恵器・韓式系土器のほか滑石製勾玉・白玉が出土している。

続いて西ムラでは、瓜破遺跡のものを含め4例が確認されており、そのうちNG83-70次調査のものはTK216型式またはTK208型式の須恵器と共伴していた。本書120はピットから出土し、周辺の遺構から推測してTK23型式～TK10型式段階に当たる可能性が高い。瓜破遺跡の例(UR93-14次調査)は古墳時代の遺構から出土しているが細かな時期は明らかでない。

残る1例(本書411)は古墳群中から見つかっている。出土層準は長原4B層という平安～鎌倉時代の地層であったが、TK73型式の須恵器を出土した149号墳の西側に当る。紡錘車の見つかった周囲からは、外面に縄席文のある須恵器甕(壺)も採集されている。この古墳の主体部は未確認であるが、紡錘車は本来この古墳に伴う遺物であった可能性もある。

長原遺跡周辺出土の紡錘車の法量は表17の通りである。孔径は0.6～0.8cmにあって、大きな差がみられないことから、表から省いている。

鬼塚遺跡の例は土師質で、直径4.4cm、厚さ2.4cmである[東大阪市文化財協会1993]。

大庭寺遺跡では須恵質3点、土師質1点が確認されている。須恵質のものうち2点は、大阪府埋蔵文化財協会が調査したA区包含層出土のA119[大阪府埋蔵文化財協会1989]と393-OLから出土したものである(註2)。前者は包含される遺物の内容からTK73型式～TK216型式の須恵器に伴うものと推定される。一部欠損しているが、直径4.4cm、厚さ1.1cm、残存部分の重さは19.9gである。薄手で、側面の稜が鋭いという特徴をもつ。一方、後者はTK73型式より先行する段階に属し、直径5.1cm、厚さ2.1cm、重さ64.0gの完形で、近畿でもっとも径の大きい製品である。残る須恵質1点と土師質の例は[大阪文化財センター1991 p.38・63]に報告されている。この須恵質のものは側面中央に稜がなく、ヘラケズリによって平坦な面に作られている。直径は5.0cmと大型で、7世紀前葉から中葉の遺物を含む溝から出土した。土師質のものは包含層から出土している。直径は4.1cmを測り、側面の稜は鋭さを欠く。その他に、須恵質で側面台形を呈するものも出土している(註3)。

深田遺跡例は須恵質の紡錘車である[大阪府教育委員会1973]。集落内の溝Bから出土しており、TK208型式と思われる把手付碗と共伴している。直径4.3cm、厚さ2.15cmある。

土師遺跡例も須恵質のもので、直径4.6cm、厚さ2.2cmである[堺市教育委員会1975]。一面

に「キ」字状のヘラ記号をもつ。5世紀後半から6世紀前半の集落内から見つかっており、製塩土器がややまとまって出土していることから、居住者が製塩にも関与していたことが推測されている。

京都府の1例は長岡京市天神下出土のもので、須恵質の紡錘車である[京都府教育委員会1979]・[高橋れい子1981]・[國下多美樹1988]。布留式から陶邑Ⅰ期～Ⅲ期の土器を含む包含層から出土している。最大径4.15cm、厚さ2.20cmで、重さ53g強である。

奈良県の1例は御所市下茶屋遺跡から出土しており、須恵質の製品である。この遺跡では韓式系土器も出土している(註4)。

近畿地方の出土例については墓に副葬されていたものが1例、その可能性のあるものが1例、その他は集落内から出土しているものが大勢を占めていた。また、須恵質のものに比べ土師質のもの比率が高く、神楽遺跡例のように滑石で忠実に模したものもあった。須恵質の紡錘車は、やはり陶邑周辺の遺跡によくみられるが、大庭寺遺跡には土師質のものも存在する。土師質と須恵質に作られたものを比較すると、成形や調整に大差はないが、土師質のものは胎土に砂粒を多く含む傾向がうかがえる。

3)他地域の事例

北部九州

北部九州での出土数は、[中村勝1986]によると17点で、すべて福岡県内のものである。ここではまとまった数を見ることのできる池の上・古寺両墳墓群の状況を[甘木市教育委員会1979・1982]から概観する。両墳墓群は隣接する丘陵上に位置し、実質的には一連の遺跡である。池の上墳墓群ではD-1石蓋土壙墓、D-19石蓋土壙墓、D-25石蓋土壙墓付近、D-26土壙墓、10号墳周溝内から合計6点の須恵質の紡錘車が出土しており、そのうちD-26土壙墓には2点が副葬されていた。一方、古寺墳墓群では2号土壙墓、3号土壙墓、9号土壙墓から1点ずつが見つかる。9号土壙墓の例は須恵質、他の2例は土師質である。2号土壙墓のものは側面に明瞭な稜をもたないが、側面にヘラケズリ調整を行うなど、算盤玉形のものと共通する手法が認められることから、「算盤玉形紡錘車」の枠内で捉えてよからう(註5)。池の上Ⅱ式およびⅢ式の土器に伴っている例が確認され、それらは5世紀初頭から5世紀前半の中頃に近い部分に比定されている。

注目される点は、紡錘車のうち原位置を留めるものの多くが棺内に副葬されているということである。この点は朝鮮半島南部の古墳の状況と同じであり、副葬する点数も似通っ

ている。しかし、池の上墳墓群 10 号墳、古寺墳墓群 9 号土墳墓のものについては棺外に供献された可能性がある。2 点の紡錘車を出土した池の上墳墓群 D-26 土墳墓のものは両者の形態が次のように異なっている。一つは直径 5.4cm、厚さ 2.1cm と、全体としてやや扁平なもので、もう一つは直径 4.3cm、厚さ 3.6cm を測り、直径の割に厚い。重量も前者の方が 10g ほど重く、繊維の撚り具合をどの程度にするかによって使い分けされていたのかもしれない。その他、両墳墓群の特徴としていえることは、須恵質のものの比率が高いことである。被葬者の集団が須恵器生産に関与していたことによるのであろうか。同墳墓群の近くには朝倉窯址群が存在する。

その他の遺跡では、福岡市吉武遺跡に 5 例あり、土師質・須恵質・滑石製のものがみられる[中村勝 1986]。中村氏によると、この遺跡のものは直径の割に薄手で、側面の稜が不鮮明という。滑石のものは表面には研磨痕が残り、直径 5.1cm、厚さ 1.8cm、重さ 78.8g である[福岡市教育委員会 1989 p.75]。その他には夜須町石櫃[橋口達也 1982]、三輪町山隈下堤、前原町三雲寺口での出土が知られている。

瀬戸内

香川県豊中町宮山窯址からは須恵質の製品が出土している[松本敏三 1982]。直径 4.7cm、厚さ 2.3cm である。外面をヘラケズリ後、ナデ調整する。焼成はやや瓦質ぎみという。宮山窯址の操業年代については TK73 型式から TK216 型式と TK208 型式の間、および TK208 型式の段階と考えられている。

岡山県倉敷市菅生小学校裏山遺跡では 2 点の土製紡錘車が出土している[岡山県古代吉備文化財センター 1993 p.208]。いずれも 5 世紀前半の包含層から見つかったものである。これまでみてきたものとは形態が異なり、上下に明確な平坦面をもたず、側面の稜は不明瞭であるため、側面形は楕円形にちかい。これらを「算盤玉形紡錘車」に含めるべきかは、まだ問題として残るが、同遺跡からは韓式系土器や初期須恵器(陶質土器)も出土していることから、ここに取上げておきたい。

4) 検討

分布

今回知りえた事例は、近畿が 22、北部九州が 17 であった。これまで、北部九州に分布の中心が考えられていたが、近畿にもそれに比肩する数量が存在するといえよう。また、両地域を結ぶ瀬戸内の事例として宮山窯址・菅生小学校裏山遺跡をあげたが、今後この地

域についても注目していく必要があろう。

長原遺跡周辺からは11点が出土した。そして、陶邑古窯址群周辺にある大庭寺・深田の両遺跡から合わせて5点が見つかっており、この2つの地域は近畿でも集中度の高い場所として重視される。

土師質と須恵質のものは北部九州および近畿でともにみられたが、近畿では土師質製品の割合が高かった。それには長原遺跡周辺のものがすべて土師質であったことが影響している。堺市土師遺跡を含め陶邑周辺の遺跡では須恵質のものが多くことから、須恵器窯が近くにあるところでは須恵質の製品が普及し、それ以外の地域では各集落ごとに自給された土師質の土器などとともに焼成されていたのであろう。須恵質の紡錘車の出土した長岡京市天神下遺跡・御所市下茶屋遺跡の例は、遺跡周辺に須恵器窯が未発見であることから、その他の須恵質製品とともに持ち込まれたと推測される。

石製のものも、北部九州と近畿で、それぞれ1例みられた。そのうち神戸市神楽遺跡例には複合鋸歯文が刻まれており注意を引く。これらも須恵質製品の入手困難な地域で代用品として製作されたと思われる。

出土状態

朝鮮半島では、今のところ墳墓からの出土例がほとんどである。そして、紡錘車は遺体の脇に土器とともに添えられているばあいが多い。これは池の上・古寺墳墓群でも同様であった。一方、近畿では墓からの出土例として姫路市三方古墳のものしか確認されていない。しかし、本書411は長原149号墳に近接する場所から見つかっており、副葬または供献されていた可能性がある。また、大庭寺遺跡は渡来した陶工の集落と考えられており[岡戸哲紀1993]、彼らの墳墓から出土する可能性は高いといえる。

法量

長原遺跡周辺のものと池の上・古寺墳墓群のものとを直径・厚さ・重さから比較した(図236)。長原遺跡周辺のものは直径・厚さとも比較的まとまっている。東ムラと西ムラのものとを比べると、西ムラにやや径の大きいものがみられる。149号墳の付近で出土した本書411(NG86-54②次調査)は直径の割に厚みがある。一方、池の上・古寺墳墓群では、突出して径の大きいものと厚みのあるものがある。その他のものの法量はややまとまっているが、長原遺跡周辺のものと比べて若干薄く、径が一回り大きいことがいえる。しかし、古寺墳墓群の2点の土師質紡錘車は、長原遺跡周辺例の平均的な大きさであり、土師質のものについては両地域で変りがない。このことは重さの比較からもいえる。

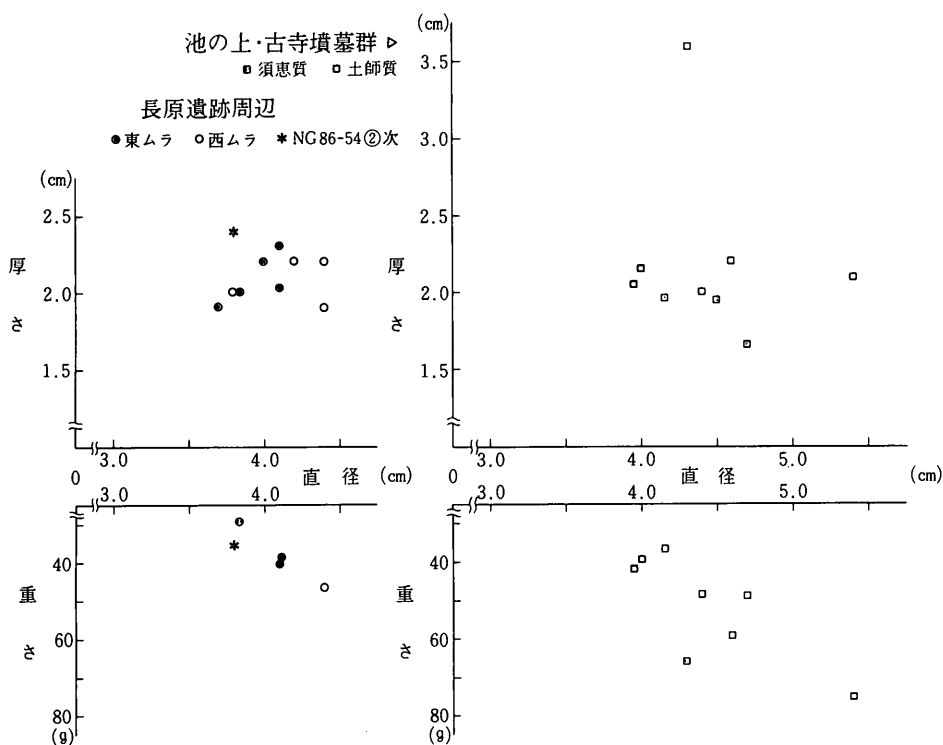


図236 法量および重さの比較

池の上・古寺墳墓群にある突出した大きさの2点は同じ土壌墓から出土したものであった。これが同じ被葬者の持ち物であるなら、糸の撚り方を変えるために2つの形態を作り分けたことも考えられる。先に、大阪府埋蔵文化財協会が調査した大庭寺遺跡の2例について述べたが、これらも形態が著しく異なっていた。共伴した土器からわずかに時期差も認められるが、この形態の違いは撚り具合を変える目的によるものと推測する。

側面角度

今回、大庭寺遺跡(大阪府埋蔵文化財協会調査)の2例と長原遺跡周辺で出土しているものについて、その側面角度を計測することができた(図237)。その結果、 100° ～ 155° までの

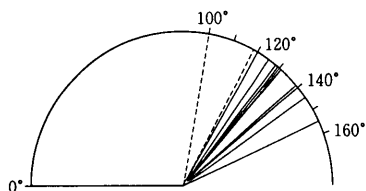


図237 側面角度の状況
(破線は大庭寺遺跡例)

範囲でばらつきがあり、 130° 程度のものが多いことがわかった。須恵器を共伴する例をみると、TK73 型式以前の段階のものでは 120° ～ 130° 、TK216 型式～TK208 型式段階では 140° ～ 145° にある。TK73 型式～TK216 型式段階と推測された大庭寺遺跡包含層出土例は側面角 100° 、TK73 型式の須恵器をもつ長原 14

9号墳付近で出土した本書411は125°であった。また、周辺の遺構の遺物からTK23型式～TK10型式段階に考えられた本書120は、もっとも側面角度が鈍く、155°であった。時期の推定できる資料についてみると、古いところに鋭い角度のものが多く、下るにつれて角度があまくなる傾向がうかがえる。この点については、時期のわかる資料に乏しいため、今後さらに検証する必要があるだろう。

5) まとめ

近畿地方にも北部九州に劣らぬ数の算盤玉形紡錘車があり、この長原遺跡周辺は陶邑周辺と並んで集中して分布する地域であることが明らかになった。この分布を朝鮮半島から渡来した人々の集中度として捉えうるならば、当時の河内湖の南岸は渡来者の一大拠点であったといえよう。また、長原遺跡周辺で出土する算盤玉形紡錘車は、現在までのところすべて土師質の製品であった。一方、陶邑周辺ではやはり須恵質のものがめだつ。渡来者たちの定住場所の選定に当り、窯業技術をもつ人々とその他の人々を分けて住まわせるようなことが、政治的に行われていたことも想像される。門田誠一氏が述べるように、算盤玉形紡錘車が女性の埋葬に際して副葬される品物であるならば、糸を紡ぐという仕事の領域は女性のものであったといえよう(註6)。その紡錘車が多数出土している地域においては、渡来者の中に女性の姿もあったのであろうか。

(櫻井)

註)

- (1) 八尾南遺跡出土の3点のうち2点については、八尾市教育委員会米田敏幸氏・吉田野乃氏のはからいで実見することができた。また、計測値の公表についても快諾いただいた。なお、長原遺跡例も含め既報告のものについては表17に引用文献を記している。
- (2) 大阪府埋蔵文化財協会の資料については同協会岡戸哲紀氏のご配慮により実見することができた。また、計測値の掲載についても許可いただいた。393-OL出土品は未公表資料であり、掲載データの内容は、今後、同協会によって刊行される報告書の記述が優先する。
- (3) 同様なものが愛知県尾張旭市城山古窯址[尾張旭市教育委員会1978]からも出土している。
- (4) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の1993年度発掘調査速報展『大和を掘る』XIVにて実見する。
- (5) 釜山徳川洞古墳群から出土している紡錘車も側面の稜が不明瞭なものである[釜山直轄市立博物館1983]。
- (6) 中間研志氏の研究では、中国大汶口文化に伴う紡錘車も女性墓から出土することが多いと述べられている[中間研志1985]。